

イヴォンヌ・ピカルについて

桐谷 慧

本論は、イヴォンヌ・ピカルの仕事について紹介を行うことを目的とする。1920年アテネ生まれのピカルは、モーリス・メルロ＝ポンティやジャン・ヴァール、アレクサンドル・コジェヴなどの教えを受けたフランスの現象学者である。彼女は1942年に共産党系のレジスタンス活動に参加したという理由によって逮捕され、1943年にアウシュヴィッツにてその命を落とした。若くして亡くなったピカルであるが、1941年に執筆した論文「フッサールとハイデガーにおける時間」(« Le temps chez Husserl et chez Heidegger »)¹が、1946年に師であったヴァールが編集した雑誌『デウカリオン』に掲載された²。この論文は、当時まだ広くは知られていなかった現象学における時間の問題を詳細に検討したものであり、その後の現象学の展開に影響を与えたといわれている。実際、エマニュエル・レヴィナス、ジャック・デリダ、クラウス・ヘルトなどがこの論文を参照しており、ピカルの研究には先駆的意義が認められる³。以下、彼女の議論の要点を見ていく。

「フッサールとハイデガーにおける時間」は、主にフッサールの『内的時間意識の現象学』とハイデガーの『存在と時間』を分析し、両者における時間の問題を比較検討した論文である。この論文においては、ヘーゲル的な意味における弁証法という概念が重要な役割を果たしている⁴。結論を先取りするならば、ピカルは、フッサールにおける時間性は弁証法的であるが、ハイデガーの場合はそうではないとする。

どのような意味において、フッサールの時間性は弁証法的であるとされるのか。よく知られているように、『内的時間意識の現象学』の第二章においてフッサールは、意識の顕在的な領域としての現前野は厚みを持つと論じている。現前野は、最も顕在的な核としての原印象、それが過去へと変容しつつ未だ保持されている把持、そして来るべきものの予持から成る。把持と予持を常に伴っている以上、瞬間

的なものとしての原印象は独立したものではありえず、そのものとしては現前野における理念的限界に過ぎない(第16節)。ピカルによるならば、湧出する「新しさ(nouveauté)」としての原印象は、それ自体として把握されることはできず、把持による媒介が常に必要なのである。

意味を欠いた「今」、純粋な受動性、未加工な印象、そのようなものは、まず存在し、そのあとで以前の「今」へと結びつけられるといったようなものではない。それは、「今」であることを中断し、厳密に連続的な仕方によって先行する諸瞬間に結びつけられることによるのみ、それ自身において「今」として現れるのだ[...]⁵。原印象は、把持のゆえに、把持によって意味を得るのであり、把持は原印象のゆえに、原印象によって意味を得るのである⁶。

原印象と把持が不可分な形で結びついていること、このような事態をピカルは弁証法と呼ぶ。彼女自身の言葉によれば、「原印象と把持の関係が弁証法的であると語ること、[...]それは、それらが二つの必然的に関係づけられた観念であるということである」⁷。

ピカルは、このような弁証法は単に原印象と把持との関係に留まらず、フッサールの時間性全般に認められる特徴であると指摘する。原印象とは、各瞬間における新しさとして多様なものであり、彼女はそれを「出来事(événement)」とも呼ぶのだが、すでに見たように、そのような原印象の現れが可能であるのは、あくまでも把持-原印象-予持という時間の恒常的で同一な形式に結びついた限りにおいてである。つまり、新しさとしての多様な出来事的原印象が、不変の形式的構造と結びついているということとなる。時間における一なるものと多なるものとの関係は、アリストテレス以来の時間論においてしばしば難問とされてきたのだが、ピカルの

解釈に従うならば、フッサールは弁証法的な仕方ですそれを捉えている。フッサールは、出来事の多様性を超過する永遠な私に頼るのではなく、形式と質料、構造と出来事、一と多といった諸対立の創造的な総合としての時間を思惟したのだとされる。

[...]「時間意識」は、「恒久性と継起、行為と状態、永遠的なものと時間的なものといった」諸対立の彼方にあり、それら諸対立を基礎づけ、しかしながら、そうすることによってそれらを超過している。時間意識は、それ自体で多様性の外にある統一性ではなく、統一性を欠いた多様性でもなく、一なるものと多なるものとの総合である。時間意識は、ヘーゲルが語るように、統合と非-統合との統合を実現する⁸。

このように、ピカルは弁証法という語を用いてフッサールのテキストを解釈している。フッサールの時間性においては、原印象と把持、形式と質料などといった諸対立が、単に解消させられたり、一方が他方に従わせられたりするのではなく、弁証法的関係として、つまりは相互に還元不可能なものとして捉えられているということとなる。

次にピカルは、このようなフッサールにおける時間性を、ハイデガーによる通俗的時間概念の批判と突き合わせて検討する。『存在と時間』においてハイデガーは、それまでの哲学的な時間の議論においては現在に特権が与えられてきたと批判的に論じている。ピカルは、通俗的時間概念とは異なりフッサールの時間性に現在の特権はない、それどころか、フッサールはハイデガーと同じように未来に特権を与えているのだと主張する。この主張は、以下のように説明される。フッサールにおいて、未来は事物ではなく、規定不可能で不可知なものである。このような否定性として、未来は意識が運動するために必要な空間を作り出し、意識が自らを超え出ること、つまりは志向性を可能とする。それゆえにピカルは、「ハイデガーにとっても同様に、フッサールにとっても未来は真理を与えるところのもの、事物の意味への接近を可能にするところのもの」⁹であり、フッサールは未来に特権を与えているとするのである。

ピカールが両者の差異を見出すのは、「視点(point de vue)」の問題においてである。彼女によれば、フッサールの時間性においては、未来に特権が与えられてはいるが、未来からの視点はない。なぜならば、意識が現在から離れることは決してできず、未来は常に現在から見られたものであるからだ。これに対してハイデガーが本来的時間性を論じる際には、死への先駆によって、「完全に未来の視点から時間が見られている」⁸とされる。ハイデガーにとって死は絶対的な終わりであり、この終わりを先取りしてそこから現在や過去を顧みることによって、現存在の全体性が把握される。このようなハイデガーの言説に対してピカールは、死はもはや時間の現象ではなく、それは時間に終わりを課すものではないとする。また彼女は、全体として捉えられたハイデガーの時間においては、全てが予見されており新しさの余地がなく、弁証法が不在であるとも指摘する。ハイデガーにおける死とは異なり、フッサールにおいて未来は終わりなきものであり、それゆえに時間における全体的な総合や成就是ありえず、常に何ものかが逃れ去る。ピカールによるならば、「ハイデガーの本来的時間は、内的な弁証法によって動かされていないがゆえに、死んでいるかのよう」⁹であるのに対して、フッサールの弁証法的時間は際限のない反復へと開かれている。このよう

にして、彼女はフッサールとハイデガーの差異を示し、後者に批判的な議論を展開しているのである。

以上、簡単に「フッサールとハイデガーにおける時間」を見てきた。最後に、このテキストがデリダに与えた影響について簡単に触れておきたい。フッサールの時間性の弁証法という概念を用いての解釈や、ハイデガーの通俗的時間概念とフッサールの時間分析とを突き合わせるというピカールの着想は、いずれもデリダのフッサール読解に見出されるものである。とりわけ、把持と原印象が弁証法的関係にあり、それが現在の単一性を不可能とするというデリダの議論は、ピカールのフッサール解釈に負うところが大きいと考えられる。弁証法という用語が用いられなくなった以降も、時間における起源的錯綜というテーマがデリダにとって重要なものであり続けたことを鑑みれば、彼へのピカールの影響は決して無視できないものであろう。

弁証法というヘーゲル的概念を用いて現象学における時間の問題を解釈するというピカールの試みは、フランスにおける現象学の受容と展開において重要な一契機を成している。イヴォンヌ・ピカールは、20世紀のフランス哲学史に小さいながらも確かな足跡を残しているのである。

¹ 1946年に『デウカリオン』に掲載されたピカールの論文、「フッサールとハイデガーにおける時間」は、2009年に雑誌『哲学』に再録された。この論文を参照する際には、『哲学』の版を指示する。Yvonne Picard, « Le temps chez Husserl et chez Heidegger » [1946], *Philosophie*, n° 100, janvier 2009, p. 3–37. 同論文については、『哲学』誌における再録に携わったダニエル・ジョヴァンナングェリが以下で検討を行っている。Daniel Giovannangeli, « La lecture dialectique des *Leçons* », *Figure de la facticité*, Bruxelles, PIE Peter Lang, 2010, p. 99–122. ピカールの生涯については、彼女の友人であったビアンカ・ランブランが、「イヴォンヌ・ピカールの来歴」というテキストを『エスプリ』に寄せている。Bianca Lamblin, « L'histoire d'Yvonne Picard », *Esprit*, n° 181, mai 1992, p. 88–101.

² レヴィナスは、以下でピカールの論文に言及している。

Emmanuel Lévinas, *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, édition suivie d'essais nouveaux, Paris, Vrin, 1967, p. 156 (『実存の発見 フッサールとハイデガーと共に』佐藤真理人ほか訳、法政大学出版局、1996年、原註51ページ)。彼はまた、雑誌『精神の自由』の特集号「レジスタンスの顔」に、ピカールに関する短い一文を寄せてもいる。E. Lévinas, « Yvonne Picard », *La Liberté de l'esprit* (numéro spécial « Visages de la Résistance »), n° 16, 1987, p. 277–278. デリダがピカールの論文を取り上げているのは、1954年に執筆された『フッサール哲学における発生の問題』においてである。Jacques Derrida, *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, Paris, PUF, 1990, p. 123 (『フッサール哲学における発生の問題』合田正人、荒金直人訳、みすず書房、2007年、310–311ページ)。ヘルトもまた、『生き生きした現在』

においてピカールの所論に対して肯定的に言及している。Klaus Held, *Lebendige Gegenwart*, Den Haag, M. Nijhoff, 1966, S. 45 (『生き生きした現在』新田義弘ほか訳、北斗出版、1988年、67ページ)。

³ この論文においてピカールは、ヘーゲルを積極的に引用しつつ弁証法という語を用いている。ヴァールやコジェーヴを経由してヘーゲル哲学を学びつつ、同時に現象学を受容するという20世紀中頃におけるフランス哲学の一場面を、このテキストは証言している。

⁴ Y. Picard, art. cit., p. 17.

⁵ *Ibid.*, p. 17–18.

⁶ *Ibid.*, p. 13.

⁷ *Ibid.*, p. 20.

⁸ *Ibid.*, p. 22.

⁹ *Ibid.*, p. 25.